

---

# 絶対に・・・

にな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶対に・・・

### 【Nコード】

N7947B

### 【作者名】

にーな

### 【あらすじ】

映画「探偵達の鎮魂歌」の後のコナンと灰原の思い。（ネタバレあり）

(前書き)

この小説はコ哀です それを承知したうえで読んでください!! それと、「探偵達の鎮魂歌」の一部ネタバレになっています。まだ見していない方は、この小説を見ないことをおすすめします。

コナンはバイクに追われ逃げ最中、橋の上からバランスを崩して川に落ちてしまった。  
しかも落ちるさいに、橋の鉄骨に左足をぶつけてしまい、骨にひび入ってしまった。

帝丹小学校 1年B組

いつものことだが、担任の小林先生が入ってきた途端、教室全体が静かになる。普段は、このままHRを始めるのだが、小林先生は教室でひとつ空いてる席に気付いた。

「あら？コナン君は休みかしら？」

「せんせー！コナンなら、病院に行ってから来るって言ってたぞ！

」！

「あら、そうなの」

コナンは例の怪我のため、しばらくの間、遅刻することになったのだ。

（病院？何があったのかしら？）

小林先生はその事を知らされていなかたため、とても気にしているのだ。

子供好きなこの性格だ。そう思うのも無理はない。

何だかんだで、あっという間に2時間目の授業が終わり、休み時間をはさんで3時間目の授業が始まった。3時間目の授業は、算数だ。みんな真剣に先生の声に耳をかたむけている。

「ここは、 $3 + 2 = 5$ になり、さっきたした13から・・・」と、みんなと答え合わせをしていたそのとき

ガラガラ

突然教室のドアが開く音がした。その瞬間、皆が一斉にその音がする方へと顔を向けた。  
コナンが来たのだ。

(こわっ・・・)  
皆が一斉に自分の方を見ているので、コナンは内心、少しビビっていた。

「あっ!!コナン君だ!!」  
「大丈夫??松葉杖なんかついて、どうしたの??」  
「あっ、あのくちよつと骨にひびが入ってしまった・・・へへへ」

さすがに何にも支えがないと歩けなかったのか、コナンは松葉杖をつかっていた。ほっそりとした足にギブスをはめられ、包帯をぐるぐる巻きにされている姿は、とてもイタイタしそうに見える。

「コナン君？いつまでそこに突っ立ってんの？早く席に着きなさい」  
「あ、はい」

席に着いたコナンに、歩美、元太、光彦が小声で話しかけてくる。

「コナン君大丈夫？」

「ああ、平気、平気！」

よっぽどコナンが好きなのか、歩美が不安で今にも泣きそうな顔をしていた。

「おい、コナン！次の体育の時間、サッカーだぞ？」

「げっ！マジかよ！ついてねえぜ・・・」

さっきまで、歩美に見せていた笑顔と裏腹に、今度はがっかりとした顔に変わってしまった。

「その足じゃ色々と不便でしょう？何か僕に手伝える事があつたら、すぐに言っして下さいね」

「おお！サンキュー！！光彦」

コナンは、光彦の優しい言葉に、（少年探偵団は俺がいなくても、光彦がいればやっていけそうだな）と心の中で考えていた。

灰原は、それを見守るような暖かい眼で見ていた。

#### 4 時間目 体育

「はあ・・・」

皆が楽しそうにサッカーをしている時1人だけ、盛大なため息をついている人物がいた。皆さんもお分かりのように、足を怪我してしまったコナンである。コナンは、唯一楽しみにしていた体育それもサッカーができなくて、とても落ち込んでいるのだ。何歳になってもやっぱりサッカーは楽しいらしい。それが、小学生相手だったとしても。

「あら、自業自得なんじゃない？」  
「うつせえ・・・」

今日は、というよりほとんどいつもであるが、灰原も体育を見学していた。

「もう、無理しないでよね」  
「へ？」

「今回は、骨にひびが入っただけですんだみただけど、へたしたら命を落としてしまっところだ　ったのよ？あなたが居なくなったら、私……」

「灰原……お前……」

「なーんて！どう？少しは元気でした？」

「お前なあ……」

（ほーんと、灰原は人をからかうのが好きだよな）

それから、いろいろ他愛もない話をしていたら、あっという間に4時間目が終わってしまったようだ。そして、やっと下校時間になった。いつものように、5人で帰っていた。でも、いつもとちよっと違うのは、やはり歩く速度が遅いことだろうか。

「あのおっちゃん、迎えに来てくれてもいいんじゃないかなあ」「」

「まったくです！」「」

「そうだよね、コナン君大変そうだもん」「」

「しゃーねえよ。おっちゃんは仕事忙しいだろうからさ」「」

確かに、小学1年生の身体で松葉杖をつけて帰るのは、大変なのだろう。そして、探偵団の3人と別れた。

「じゃーな！！コナン、灰原！！」「」

「さようなら。灰原さん、コナン君！」「」

「バイバイ！！コナン君、哀ちゃん！！」「」

「おう！じゃーな！！」「」

「また明日ね」「」

また、2人きりになった。灰原はコナンの少し前を歩いている。それを、コナンが遅れないように必死でついて行っている。いつもなら、逆なのだが……。今日は2人とも何も話さずに帰っていた。しかし、2人が別れる場所に着いたとき、灰原が突然口を開いた。

「体育の時に言ったことほんとだから」

「え？」

「私前から絶対に居なくならないでよね」

「あっ……おいつ!!」

それだけ言うと、灰原は走り去って行った。コナンはそんな灰原の後ろ姿に向かって叫んだ。

「もう、無茶はしねえよおお!!」

灰原はこの言葉を聞いて、安心した。この一言を、ずっと聞きたいと思っていた。だからなのだろうか、嬉しくて、自然と顔が笑っている。こんな顔を彼に見られなくて良かったと、灰原は、心底思っていた。

後ろ姿ではあるが、彼には彼女の表情がわかっているのだろうか。

そして彼もまた、彼女と同じように微笑んで、彼女が走り去っていった方を、まだ何か言いたげに見つめていた。

もう、お前を1人になんかせせない。

お前の前から居なくなったりしない。

オレは、一生お前を守り続ける。

何があっても・・・

絶対に・・・

(この思い、あいつに届いただろうか

?)

(後書き)

初めまして にーなですっ！初投稿です

初めて書いたので、ちょっとおかしいなあと思うところもあると思います。なので、もっと勉強したいと思います(笑)

これからも、いろんなコ哀小説を書いていきたいと思うので、読んで頂ければとても嬉しいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7947b/>

---

絶対に・・・

2010年10月11日17時25分発行